



発行日 = 2003年2月25日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・岡本賢・井元純子
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内 (田沼彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail=tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.15 Shomei Tanteidan Tsu-shin

国内調査レポート

「あかりと精神」

～京都・鞍馬火祭～

海外調査レポート

「イエメンあかり事情」

～イエメン～

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告

(都営荒川線・三ノ輪)

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン(10/19)報告

照明探偵団倶楽部活動 3

街歩き報告

(汐留開発地区)

照明探偵団倶楽部活動 4

研究会サロン(1/28)報告

照明探偵団倶楽部活動 5

Transnational Tanteidan Forum 2002

in TOKYO 報告

面出の探偵ノート

照明探偵団日記



サナア・旧市街から見た日の出

鞍馬の火祭・あかりと精神

京都・鞍馬 2002/10/21-22

田沼 彩子 + 早川 亜紀

毎年10月22日に行われる京都・鞍馬寺の鎮守社である由岐神社の火祭。火が灯された大きな松明が狭い旧街道を連なって進むダイナミックお祭り、京都三奇祭の一つに数えられる。日常生活の中では触れる機会がほとんど無くなった、燃えたぎる火の魅力と、人々と火祭との関係を調査した。



祭前夜の鞍馬寺山門



子供や大人用の松明
大きいものは重さ100kgを越す

叡山電鉄・出町柳駅から単線を走る電車で揺られること30分。北山杉の鬱蒼とした木立を抜けると、夕暮れの鞍馬の里に到着した。ひんやりとした空気が全身を包む。一度の深呼吸で東京のぐもった空気が全て吐き出されたような気分になる。私たち照明探偵団は、今回京都三大奇祭の一つ、洛北・鞍馬の火祭の調査に訪れた。

● 静かな祭前

火祭前日の鞍馬の里は意外な程の静寂に包まれていて、私たちは少々拍子抜けしてしまった。祭り前日のどこか浮き足立った雰囲気があるのでは無いか、と予想していたからだ。旧街道沿いには昔ながらの格子を正面に配した家々が軒を列ねる。景観を壊さないように、と家をつくる場合には必ず格子を付けなければならない、とか。どの家も軒の高さがほぼ同じで、アイレベルに合った高さに統一されていて、圧迫感を与えない美しい町並みが広がっていた。周囲を山々に囲まれた里に夕闇が迫る。街灯は白々とした蛍光灯20Wの心細いものが35～40mピッチでポツリ、ポツリとついているだけ。街灯間の路面照度わずかに0.2ルクス。山里の寂し気な雰囲気が漂う。

「ごめんくださいー」、格子戸をカラカラと開けて、火祭の準備をしていた一軒にお邪魔した。長さ3～4メートルはあろうかという大きな松明が土間に大切に安置されていた。重いもので100kgを越すと言うから驚きだ。毎年6月頃から材料となるツツジの芝などの雑木を集め、火祭りに向けて徐々に準備を行うという。最後の点検に余念が無いお父さん。松明全体を縛る藤の根に緩みが無いか、確認している。伝統を守る心意気が伝わってくる。年に一度の晴れ舞台を明日に控えて、住民の人たちもどこか誇らし気に見える。

とっぷりと日が暮れた、と言ってもまだ7時。それなのに辺りには漆黒の闇がひたひたと迫る。鞍馬寺山門横の堤灯が山門両脇の仁王像をボンヤリと照らし上げ、幽玄の世界を創り出している。ただ“浄域”と記された札が立てられ、そこから先へ人を寄せつけさせないオーラを放っていた。このシンと静まり返った山門が、本当に明日火祭りの舞台となり、明々と燃える炎に包まれるのだろうか？半信半疑のまま、誰も乗客のいない叡山電車・下り線に乗り込み鞍馬の里を後にした。



祭りの始まりを知らせる神事振（じんじぶれ）



最初は子供たちが小さな松明とともに街道を練り歩く

●火祭とその精神

10月22日、火祭当日。前日の静寂が嘘のような人波が小さな鞍馬駅の改札から続いている。満員の叡山電車が京都市内から次から次へと人を運んでくる。家々の前に配置された松明や“御神燈”と書かれた堤灯が祭り気分を盛り上げていた。

大きなかがり火が配置された“御旅所”近くに陣取った私たちは今か今かと旧街道の先に視線を遣る。

「神事に参らっしゃーれ」の神事振（じんじぶれ）のかけ声とともに家々のかがりに火が入る。祭りの始まりを知らせるかけ声だ。ポツポツと点り始める家々の小さな火。やがて御旅所の大きなかがり火にも火が入る。

背景の山々の闇を借りて、道幅の狭い旧街道がほんのりと赤く染まっていく。やがて、かがり火から立ち上る白い煙と燃える木々の香りが辺りに立ちこめて、神秘的な世界が広がる。「サイレイヤ、サイリョウ」。松明をかついだ人々のかけ声が遠くから聞こえてくる。だんだんと近付いてくる声。

様々な大きさの松明が練り歩く。最初は子供用の小さな松明、そして大人の持つとても大きな松明が徐々に数を増やして集まってくる。御旅所の大きなかがり火も勢いを強め、近付けない程のものすごい迫力で燃え上がる。木が弾ける音とともに空を舞う火の粉が闇夜を真っ赤に染め上げる。一瞬自分が太古の昔にタイムスリップしてしまったかのような錯覚に陥る。こんなに大きな本物の火を間近で見たのはいつのことだったか。

大昔から人々は火を畏れ、敬い、それを手に入れたいと願い願って来た。人間は火を電気に変え、自由自在に使い回し、一見手におさめたかのように見える。それでも燃え尽きる火にはどこか本能に訴えかける、どうにも逆らえない力があるように感じるのはどうしてだろう。

火祭が終わる。跡形も無くなった松明。全てが燃え尽きた後、鞍馬の人々はまた来年の火祭りに向けて準備を始める。人間が燃え尽きる火にしか宿ることのない独特の力を感じ、本能が火を求め続ける限り、火祭の火が尽き果てることは無いだろう。



子供たちも火の周りを楽しげに踊っていた



長さが3mを越す大きな松明を立ち上げる大人たち

イエメンあかり事情

Sanna, Yemen 2002/12/04-08

竹内 聡美 + 橋本 八栄子

1986年にユネスコの世界遺産に登録されているサナアの旧市街は、古いもので400年以上前に建てられたという高層住居群（塔状住宅と称される）によって構成されている。無論電力などあるはずもない時代に建てられたこれらの住宅は、自然の創り出す環境を上手に採り入れることで快適性を手に入れていた。



「方角が大事なんだよ。方角がね。」
イエメン人建築家アミン・アブドサイード氏は熱く語る。高層の住宅が密集するここサナアの旧市街では、住宅の間取りや開口部がどの方角を向いているかがその建物の居住環境を大きく左右するというのだ。

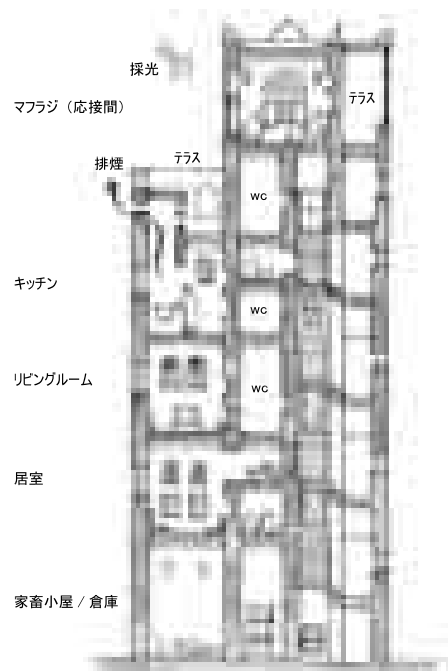
イエメンの首都サナアの旧市街には東西約1.5km、南北約1kmの城壁の中に約6400棟もの古い住宅、43の大小を含むモスクが存在している。容易に歩いて廻ることができる規模の街にしてはその建物の数は過剰だ。旧市街を構成している住宅の殆どは石や日乾煉瓦による高層の建造物である。5、6層のものが大半だが、高いものでは8層、高さ25mにも及びこれがサナアが「世界最古の摩天楼都市」と称されている所以である。度重なる部族間抗争から防御する目的で周囲に巡らされた城壁内で人口が増加し、世帯が増えるのに従って当然住宅も密集した。次第に住宅は上へ上へと高層化し、現在のような塔状住宅の姿ができあがった。高層化は身の安全を確保するにも有効であり、街路に面している頑丈な玄関扉は当時の様子を物語っている。

●塔状住宅のつくり

住宅密集地での低層部は当然のごとく陽当たりが悪い。また安全確保上、更には構造上の問題も加味して低層部は開口部が少ないために昼でもかなり薄暗い。かねてからこれらの部分は家畜小屋や倉庫に利用されており、居住部分は2-3層より上部となっている。

階段は外壁に面する箇所に設けられ、アラバスターと呼ばれる大理石の一種を薄く加工し、採光用の窓として使用した。かなり急な階段をぐるぐる廻りながら登っていくと、次第に階段室も明るくなってくる。私たちのような訪問者は家族の居住階を越えて更にすすみ、最上階へと通される。ここはマフラジと呼ばれ、親しい友人が集って屋下がりと共に過ごしたり、また結婚式などの祭事にも使用されるいわば応接間である。イエメンではカートという多少の覚醒作用を持つ葉を嗜好品として噛む習慣があるが、このカートを持ち寄って一同に会する「カートパーティー」なるものが催されるのもここマフラジである。標高2300mのサナアではマフラジに辿り着くだけでも息が切れるほどだが、一旦腰をおろして落ち着くと最上階のこの部分は陽当たりや通風も申し分なく居心地はすこぶる快適である。北側を除く壁面に採光のための開口部を大きく設け、部屋の両隅上部には通風を目的とした小窓が設けられている。日中は、窓の木格子を開閉して厳しい日差しを和らげる。高地特有の一日を通じての気温差を、開口の大きさの調節によって補う工夫である。

塔状住宅の最上階には決まってこのマフラジがあり、通常土足厳禁である。部屋の壁面に沿ってぐるっとマットレスのようなものが敷き詰められており、家の主を含め来客一同は部屋を囲むようにここに腰掛ける。靴を脱いで床でくつろぐというスタイルは、私たち日本人にとっても親しみやすいものだ。



塔状住宅のつくり



塔状住宅



密集する塔状住宅群



マフラジ内部から見たカマリア窓

●マフラジからの風景

サナア旧市街のマフラジから眺める夕陽と薄暮の街並みはまさに絶景である。あたりが暗くなるにつれ次第に風も冷たくなり、ちょうどそのころモスクからアザーン（肉声による礼拝への呼びかけ）が流れはじめ、人々がモスクに向かって動き始める。私たち異邦人はここマフラジからイエメンの人々の生活を全身で体感することができるのである。

遠い山並みに陽が沈み、あたりがすっかり暗くなると夜景の主役にとって代わるのがカマリアの窓あかりである。カマリアとは色とりどりのガラスがはめ込まれた半円形の装飾窓で、塔状住宅を特徴づける重要な要素となっている。ぽつぽつと点き始める窓あかりを観察していると、その約7割が蛍光灯の白い光、残りの3割が電球による暖かい光といった具合に意外にも住宅から漏れてくる光が白いことに気が付く。聞くところによるとイエメンに蛍光灯が普及し始めたのは1960年代（革命後）とのこと。そのあたりからオフィスのみならず住宅にまで白色蛍光灯が浸透し始めている様子は戦後の日本を思わせた。



蛍光灯の下であかり問答

●マフラジでのあかり問答

ある屋下がり旧市街でのカートパーティーに招待された。このときに冒頭のイエメン人建築家アミン氏との対面がかなうことになる。カートパーティーは様々な職種の人々の見解が伺える絶好の機会であったので、気になっていたことを色々質問してみることにした。

「なぜ、自宅の照明に白色蛍光灯を使用しているのか？」という質問には「ランニングコストが安いから」「明るいので目に優しいから」など、合理性を重要視した理由が複数の人より挙げられた。加えて最新の建築事情に精

通しているアミン氏の話は続く。曰く「直管蛍光灯の白い光はクールでシャープな印象を与えるので近代建築には欠かせない」らしい。最近新築された彼の自邸でもやはり蛍光灯が多用されている。「でも、ベッドルームは暖かい色の光の方が落ち着いてよい」ということに関してはその場にいた全員の意見が一致。また、旧市街に関しては白い窓あかりよりも暖かい電球色の窓あかりの方が似合うというのが大半の意見であった。

イエメンの人々は自分たちの生活スタイルにかなりのこだわりを持っており、無論光の考え方に関しても例外ではない。私たちの質問一つ一つについてもそれぞれが異なる見解を熱く語ってくれる。興味深かったのは、それでもみな共通して、毎日の日の出や日没など、自然の明るさの遷り変わりを愉しみ味わっているということ。長いあいだ自然の光と共に生活を営んできた彼らにとって、未だ、照明は「明るくするもの」という認識でしかないのかもしれない。

この日も随分と陽が沈んで辺りがすっかり暗くなろうとしても誰も照明を点灯しようとしなかった。どのくらい暗くなったら点灯するのかと窺っていると、なんとマフラジの中央で1.8ルクスとなった頃ようやく照明器具が登場。「いったん暗くなってしまったらね。」もう関係ないんだとでもいうように、家の主は白色の蛍光灯を点灯した。



旧市街の夜景

第16回街歩き

2002年10月9日

三ノ輪商店街

みなさんは東京に「ちんちん電車」が未だに現役で走っていることをご存知ですか？ 今回の街歩きは昭和の情緒あふれる都電荒川線に乗って三ノ輪商店街の「生活のあかり」を探索してきました。

■街歩きレポート・その1

唯一の都電として愛されている「都電荒川線」。始発の早稲田駅に集合した我々は早速「ちんちん電車」に乗り込みました。どこまで乗っても160円というリーズナブルさ。しかもあまり知られていないのですがなんと貸切まで可能というまさに地域密着型の電車です。終点の三ノ輪橋まで池袋、大塚、王子といった市街地も通り、ゆっくりと走る電車の窓から眺める東京の夜景も良いものです。

約50分の都電の旅を満喫し三ノ輪橋のひとつ手前の荒川一中前を下車し、いよいよ今回の目的である商店街「ジョイフル三ノ輪」を目指します。とここまでは良いのですがどこかいつもと様子が違います。この日は面出団長がどうしても所用があり出席できないということで今回の街歩きは団長不在です。多少の不安は残りますが、いざ出発です。一歩商店街に足を踏み入れるとまさに昭和にタイムスリップしたような感覚に陥ります。アーケード街のメインストリートは3灯が1ユニットの水銀灯とナトリウムランプで構成された器具で照らされていて、中央の水平面照度は平均で約300lx程です。また、この器具結構きちんと作られていて歩いていてもまぶしくないように考慮されていました。

商店街を形成する肝心商店はというと各店舗とも実に個性的というか、エネルギー感というか・・・飲食店、八百屋さん、お肉屋さん、魚屋さん、薬局、和菓子屋さん等々、各商店のファサードは全く統一感のない照明が混在していました。特に団員の皆さんが興味を持ったのは、まるで電気屋さんの

ような魚屋さん、そしてハロゲンランプをこれでもかと思ったお惣菜屋さんです。魚屋さんには魚を新鮮に見せるために様々な種類の照明がダクトから吊るされていました。一方お惣菜屋さんの方はというとこれでもかというくらいのハロゲンランプが店頭で吊り下げられて、惣菜の陳列棚の照度は3000lxを超えていました。およそ照明手法など関係ないといった様子なのですがアーケードの中にいると違和感や不快感は思ったほどなく、むしろ懐かしい感じがしてくるから不思議です。団員の皆さんも興味津々で色々な場所でシャッターを押していました。

商店街から一歩裏の路地に入ればいわゆる赤提灯がいくつもあり、路地を照らすのは古ぼけたかさに裸電球という最もシンプルな照明、このほのぼのとしたあかりはなんともいえず味のある光でした。そこに野良猫が歩いたりして雰囲気さをさらに盛り上げます。アーケードのあかり同様こういう夜景は我々日本人の原風景なのかもしれませんね。でもそれは明かりだけの力でそう感じるのではなく、そこで生活している人々の息遣いと相乗効果が我々にそう感じさせるのだと思いました。

今回は照明探偵団版「ぶらり途中下車の旅」のような街歩きとなりましたが、皆さんも都電荒川線に乗ってどこか懐かしい三ノ輪の町を訪れてみてはどうですか？

(岡本 賢)

■街歩きレポート・その2

この日、私は皆の集合場所に行くことができなく、現地集合をしたので、一人地下鉄日比谷線の南千住駅から南千住商店街、仲通り商店街と歩き、やっと目的のアーケード、ジョイフル三ノ輪に辿りついた。そこは辺りがすっかり日が暮れて暗いとは対照的に、煌々と明るく、突如あらわれた異空間の様であったが、明るい光を見てほっとした感覚を覚えた。

このアーケードが設置される以前は、もともと三ノ輪銀座商店街と呼ばれ、よく観察してみるとアーケードの両端に並ぶ2、3階建ての商店兼家はかなりの年季を感じるものが多い。古くからの商店街をリニューアルしたようである。

アーケードの屋根は日中自然光が差し込んでくるように半透明のトタン素材が使用され

ていた。ここを明るく照らしているのは、ナトリウムランプ1灯と水銀灯2灯がワンセットになった混光照明が天井部分、両端に4～5mおきに直付けされ各商店の演色性を保っている。さらに床材がページュの石材で、そこそこの照り返しがあった。他には都電のマークの付いたブラケット各柱に設置されている。

各商店の照明計画は、ほとんどの照明機具が後付けのようで好き勝手やっている印象をうける。その中で一番目立っていたのは魚屋で、ハロゲンランプをワンサカ設置していた。

一歩路地裏に入るとそこは薄暗く、裸電球に薄いかさがかぶったものがポツリポツリと灯っていて、なんだかタイムスリップしてどこかに迷い込んだ様なノスタルジーを感じた。残念だったのは、ほとんどの商店が



1. 都電荒川線乗り込む団員たち
2. ジョイフル三ノ輪アーケード街の様子
3. 各商店の印象的なファサード

18:00～19:00には閉ってしまい、切ない気分です。アーケードを後にした。

(岡部 美楠子)



アーケード脇の赤提灯の明かり